

## 1. はじめに

本稿は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の第7番目の長編小説『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)に登場するイーディス(Edith)を親子関係の観点から考察することを目的とする。多くの批評家が指摘するように、『ドンビー父子』の中心テーマは親子関係である。これは、『ドンビー父子』の展開が娘フローレンス(Florence)による父ポール・ドンビー(Paul Dombey)の内的変化を軸としていることから明らかである。全てにおいて仕事を優先し、家庭を蔑ろにしてきたドンビーは待望の息子ポール(Paul)と死別し、再び息子が生まれることを期待して再婚する。しかし再婚相手のイーディスはドンビーが長年信頼してきた部下カーカー(Carker)と駆落ちしてしまう。不幸に不幸が重なり、ドンビーは家庭を失った後、今までの人生で最優先としてきた会社を無謀な投機により破産させてしまう。このように全てを失ったドンビーだが、その原因は彼のプライドの高さである。

“The earth was made for Dombey and Son to trade in, and the sun and moon were made to give them light” (*DS* 12; ch.1).と信じ込み、驕り高ぶったドンビーが自分の思惑通りに進まず全てを失う展開は、『ドンビー父子』が度を越えたプライドを批判していることを意味する。そして、そのプライドの高さをどのように改めていくかの答えとして、ドンビーがフローレンスとの関係を見直し、それまで彼女を蔑ろにしてきた過ちに気付くこととしている。つまり、『ドンビー父子』はフローレンスを通してプライドの高さを克服し、父性を取り戻すドンビーを中心に繰り広げられる小説なのである。

では、『ドンビー父子』においてプライドの高さが問題となる人物はドンビーだけなのだろうか。プライドの高さでドンビーに引けを取らない人物はイーディスである。彼女は、第21章で初めて登場する際に“proud” (*DS* 316; ch.21)、“haughty” (*DS* 316; ch.21)、“wilful” (*DS* 316; ch.21)という形容詞が羅列されるほどの非常にプライドの高い女性である。そこで本稿では、「イーディスは単なるプライドの高い女性なのか」という疑問を出発点とし、彼女の人物像を考察する。まずは、イーディスの特徴を明らかにするために『オリヴァー・トウイスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)に登場するナンシー(Nancy)とイーディスを比較検討する。これは、ナンシーとの共通点と相違点を把握することによりイーディスの特徴が効果

的に浮かび上がってくると思われるからである。そして、その特徴を押さえた上で、あまり注目されていないイーディスの母親としての一面に光を当てたい。

## 2. ナンシーとイーディス

### (1) 彼女達の境遇

まずはナンシーとイーディスの共通点を見てゆこう。マイケル・スレイターが “This is how closely the conception of [Edith’s] character, situation and actions relates to that of Nancy” (Slater 260).と述べているように、ナンシーとイーディスには共通点がある。第一に、親あるいは親代わりの人物へ反発することである。ナンシーは物心がつかない頃から掏摸のフェイギン(Fagin)に養育されてきた。その日常は掏摸を始めとする悪事を働くことであり、彼女は何の抵抗も無く毎日を過ごしてきた。しかし、オリヴァー(Oliver)との出会いでそれまでの人生に疑問を持ち、次第にフェイギンへ反発するようになる。一方のイーディスは、母親ミセス・スキュートン(Mrs Skewton)により、男性の注目を浴びる存在となるよう教育されてきた。彼女はそのような扱いに反感を持ちながらも、しぶしぶその状況を受け入れてきた。しかし、ドンビーとの再婚によるフローレンスとの出会いで、それまで押さえてきたミセス・スキュートンへの不満が爆発し、反発するようになる。

第二に、子供を守ることである。ナンシーは、フェイギンに殴られるオリヴァーをかばったことを皮切りに彼を必死に守るようになる。最終的に、フェイギンを始めとする犯罪者からオリヴァーを完全に引き離すためにナンシーは行動を起こすが、それが仇となり彼女はサイクス(Sikes)に殺害される。ナンシーはオリヴァーを守るために犠牲となったのである。一方のイーディスは、ミセス・スキュートンに近付けないようにすることで彼女を守ろうとする。ミセス・スキュートンは、イーディスが新婚旅行で留守の間はフローレンスを預かりたいと言う。しかし彼女の魂胆を見抜いたイーディスは決して許可しない。『ドンビー父子』が展開するにつれ、イーディスとミセス・スキュートンはフローレンスを巡り、激しく対立する。イーディスは、フローレンスに関してはミセス・スキュートンに一切妥協しないのである。

このように、ナンシーとイーディスは、親あるいは親代わりの人物へ反発することと子供を守ることの二点で共通している。つまり、彼女達には守るべき人物を必死にかばう強さがありつつも、その強さの背後には、親あるいは親代わりの人物と決して心を通わすことができない悲しい境遇があることが分かるのである。

## (2) 彼女達の行動の意味

このように、ナンシーとイーディスは各々の人生において悲しい境遇を抱えているが、だからこそ彼女達はオリヴァーやフローレンスを必死に守るとも言えるだろう。しかし、彼女達にその行動を起こさせるオリヴァーやフローレンスが彼女達に相違点を与えている。

ナンシーとイーディスの決定的な違いは母親あるいは母親代わりとしての役割である。これは、オリヴァーとフローレンスの年齢が関係する。まずはナンシーを見てみよう。『オリヴァー・トゥイスト』の冒頭で誕生したオリヴァーは、一定の年齢からは成長しない。つまり、オリヴァーは終始一貫して子供のままである。そのため、ナンシーのオリヴァーを必死に守る行動は母性によるものと考えられなくはないが、母親代わりとしての役割となると、いくらか制限される。オリヴァーとの出会いでそれまでの人生を振り返るようになったナンシーは、“‘Civil words, you villain! Yes; you deserve’em from me. I thieved for you when I was a child not half as old as this (pointing to Oliver). I have been in the same trade, and in the same service, for twelve years since; don’t you know it? Speak out! don’t you know it?’” (OT 133; bk.1, ch.16)とフェイギンへ怒りをぶつける。そしてサイクスに殺害される直前、ナンシーは彼に“‘... let us both leave this dreadful place, and far apart lead better lives, and forget how we have lived, except in prayers, and never see each other more. It is never too late to repent. They told me so—I feel it now—but we must have time—a little, little, time!’” (OT 396; bk.3, ch.9)と訴える。ナンシーのこの言葉は、オリヴァーを守るためというより、彼女自身のためである。ナンシーは、フェイギンへは自分を子供らしく養育してくれなかったことの惨めさを訴え、サイクスへは彼への愛情を捨てきれない未練を滲ませながらも、別れを選ぶ決意を示している。つまり、ナンシーは結果的には自分の身を犠牲にしてオリヴァーを守ったことになるが、その行為は、母親代わりとしてというより、それまでの人生を振り返る、いわば「自分探し」の延長線上にあったものと解釈するほうが自然なのである。

一方のイーディスを見てみよう。『ドンビー父子』の冒頭で誕生するのはフローレンスの弟ポールであり、フローレンスはその時点では幼い少女である。しかしオリヴァーと違い、フローレンスは『ドンビー父子』が展開するにつれて成長してゆく。彼女はウォルター・ゲイ(Walter Gay)と結婚後は妻となり、息子ポール(Paul)を出産後は母となる。つまり、フローレンスには、娘—妻—母となることで女性としての役割が増えるのである。そうになると、娘フローレンスに対する母親としての役割をイーディスが負うことになるのは自然で

ある。確かに、ナンシーがフェイギンにしたように、イーディスも自分を子供らしく育ててくれなかったことについてミセス・スキュートンを責める。しかし、フローレンスに出会った後は、二人の口論の内容がミセス・スキュートンのイーディスへの教育法からフローレンスを巡るものへと変化していく。“‘Leave [Florence] alone. She shall not, while I can interpose, be tampered with and tainted by the lessons I have learned’” (DS 474; ch.30).というイーディスの言葉は、母親としてフローレンスを守る決意表明であろう。つまり、イーディスはフローレンスとの出会いでそれまでの自分の人生に惨めさを更に感じつつも、その惨めさを母親としてフローレンスを守ることで乗り越えようとしているとも解釈できるのである。

このように、ナンシーとイーディスには、母親あるいは母親代わりとしての役割で相違点がある。ナンシーがオリヴァーを守るのは、母親代わりとしてというより自分の過去を清算するという意味が強い。一方のイーディスがフローレンスを守るのは、フローレンスに二の舞を踏ませないという母親としての意識からであり、この母親としての意識こそイーディスの特徴である。子供を守る行動を起こさせる心理が自分と他者のどちらにより強く働いているかが、彼女達を隔てるものなのである。

### 3. 母イーディス

このように、ナンシーと比較検討することでイーディスの特徴が明らかになった。イーディスはプライドの高い女性だが、フローレンスとの出会いにより母親としての意識を持つようになる。母親としてのイーディスに注目してみると、そもそも『ドンビー父子』では、彼女が初めから母親として前面に出ていることに気付く。第21章で、バグストック少佐(Major Bagstock)はドンビーへイーディスを初めて紹介する。そこで彼はイーディスを、18歳でグレインジャー(Granger)と結婚して息子をもうけるものの、結婚後一年で未亡人となってしまった女性だと説明している。また、その一人息子が4、5歳で水死したことも付け加える。それに対するドンビーは、イーディスに息子がいたと聞いた時は“a shade came over his face” (DS 322; ch.21)、そして水死したと聞いた時はすかさず“raising his head” (DS 322; ch.21)で反応する。つまり、ドンビーはドンビー父子商会の後継者を再びもうける目的でイーディスを見ているのである。イーディスは後継者をもうけること、言い換えれば、母となることを初めから期待されている女性なのである。

では、『ドンビー父子』においてイーディスは母親としてどのように描かれているのだら

うか。ここでは、ドンビーの視点とイーディス自身の視点から見てゆくことにする。まずはドンビーの視点から見てゆこう。彼の視点から見てみると、彼の疎外感と怒りを通してイーディスの母親としてのフローレンスへの愛情が分かる。それまで誰に対しても刺々しかったイーディスはフローレンスにだけは優しくなり、その気持ちを“‘You are dear to me, Florence. I did not think that anything could ever be so dear to me, as you are in this little time’” (DS 550; ch.35).と素直に話している。そして、フローレンスもイーディスが常に優しく接してくれて自分を愛していることを分かっている。イーディスはフローレンスを心から愛しているため、読者は、そんな彼女を“proud” (DS 316; ch.21)、“haughty” (DS 316; ch.21)、“wilful” (DS 316; ch.21)と形容された人間と同一視することにどうしても違和感があるだろう。ドンビーもイーディスのギャップに気づき、“As [Edith] sat down by the side of Florence, she stooped and kissed her hand. He hardly knew his wife. She was so changed. It was not merely that her smile was new to him – though that he had never seen; but her manner, the tone of her voice, the light of her eyes, the interest, and confidence, and winning wish to please, expressed in all – this was not Edith” (DS 548; ch.35).という印象を受けている。これは、イーディスと不仲になったドンビーの視点からの描写なので、彼女とのギャップがより強く裏付けされている。そして決定的なのは、イーディスがカーカーと駆落ちしたことに逆上したドンビーがフローレンスを殴った時の言葉である。語り手は、ドンビーが“... they had always been in league” (DS 721; ch.47).とフローレンスに言ったとしている。ここでの「結託して」(in league)という表現は、イーディスとフローレンスが親しくしていたことを示す。以前、ドンビーには、死別した前妻ファニー(Fanny)とフローレンスが心からの愛情で結ばれていたため、二人の中には決して入れない疎外感があった。ここで「結託して」という表現が使われるということは、ドンビーには再び以前と同じ疎外感があったと解釈できる。すなわち、彼は、ファニーとフローレンスにそうであったように、イーディスとフローレンスにも心からの愛情があることを認めているのだ。このように、ドンビーの視点から彼の疎外感と怒りを通してイーディスを分析してみると、彼女は母親としてフローレンスを確かに愛していることが分かる。

次に、イーディス自身の視点から見てみよう。イーディスの視点からは、彼女自身の葛藤を通して母親としての強い意識を読み取ることができる。イーディスとフローレンスは確かな愛情で結ばれているものの、二人の関係が次第に気まずくなってゆく。それは、フローレンスが“‘You have changed your manner to me, dear Mamma’” (DS 703; ch.47).とイー

ディスへ言うことから明らかである。これは、イーディスがカーカーと駆落ちする直前のやりとりである。イーディスが駆落ちするのは、カーカーを愛しているからではない。彼女は、物心をつかない頃から男性の注目を浴びる存在となるよう教育されてきた。反感を持ちながらもその状況を受け入れてきた彼女は、ミセス・スキュートンと死別して以来、愛情の無いドンビーとの結婚生活に耐えることが限界だったのだろう。駆落ちという強硬手段でドンビーとの結婚生活に終止符を打とうとしたのである。梃でも動かないプライドの高いイーディスが、このような大胆な行動を起こしても不思議ではないかもしれない。しかし、駆落ちを目前に控えた彼女がフローレンスと気まづくなるということは何を意味するのだろうか。イーディスがフローレンスへの態度を変えるということは、彼女が、母親として駆落ちすることには抵抗があることを意味する。つまり、イーディスは、個人としては駆落ちに踏み切れても、母親としては踏み切れないのである。そのような彼女の状態は、個人としての自分と母親としての自分の板挟みと言えるだろう。結局イーディスは駆落ちするが、彼女はその行為が “‘The stain upon your name, upon your husband’s, on your child’s’” (DS 936; ch.61).であることを自覚している。イーディスが板挟みの状態に苦しんでいることは、彼女が駆落ちする時にフローレンスから “‘Mamma!’” (DS 716; ch.47)と呼ばれた時に “‘Don’t call me by that name! Don’t speak to me! Don’t look at me! — Florence!’... ‘don’t touch me!’” (DS 716; ch.47)とすることから明らかである。駆落ちする自分が、愛する娘フローレンスから “‘Mamma!’” (DS 716; ch.47)と呼ばれることほど母イーディスにとって惨めなことはないのであろう。ここから、イーディスの母親としての強い意識を読み取ることができる。そして決定的なのは、駆落ち後のイーディスが第 61 章でフローレンスと再会した時の会話である。フローレンスはイーディスのことを許してもらうようにドンビーに頼むと言う。その熱心さに感動したイーディスはフローレンスに “‘... believe me, upon my soul I am innocent!’” (DS 936; ch.61)、 “‘Guilty of a blind and passionate resentment, of which I do not, cannot, will not, even now, repent; but not guilty with that dead man. Before God!’” (DS 936-37; ch.61)と言う。(that dead man)とはもちろんカーカーであり、彼とは何の関係も無いということをイーディスは話している。すなわち、駆落ちという世間に非難される行動を取ったことは事実だが、フローレンスの母親としては決して汚れていないことをイーディスは強調しているのである。このように、イーディス自身の視点から彼女の葛藤を通して分析してみると、イーディスは母親としての意識を強く持っていることが分かる。

#### 4. おわりに

以上、「イーディスは単なるプライドの高い女性なのか」という疑問を出発点とし、イーディスの人物像を考察してきた。ナンシーと比較検討することで、イーディスの特徴が、母親としての意識がある点だということが分かった。そしてその特徴をドンビーの視点とイーディス自身の視点から分析すると、イーディスは本心からフローレンスを愛し、その愛情は母親としての強い意識に裏付けられていることが分かった。駆落ちして「墮ちた女」(fallen woman)になったイーディスは、心はれっきとした母なのである。

#### 引証資料

Dickens, Charles. *Dombey and Son*. Ed. Andrew Sanders. London: Penguin, 2002.

---. *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. London: Penguin, 2002.

Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1986.

出典：『英語英文学論叢』日本大学大学院英語英文学研究会 33 (2012) : 15-22.